

# Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。  
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、  
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。



「一期一会」の心で可能性を広げ、  
演出家としてのキャリアを開花

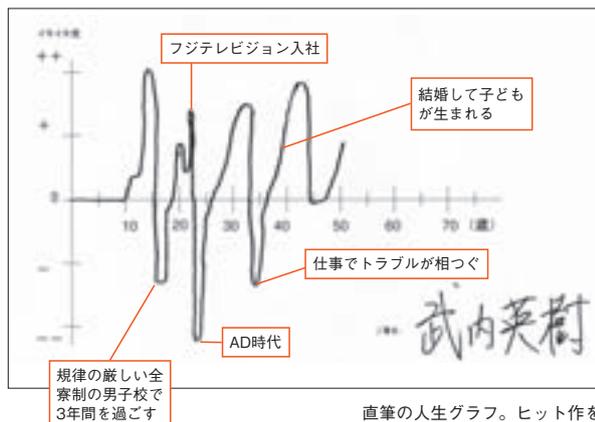
**武内英樹氏** Takeuchi Hideki

演出家、映画監督

Career History

武内英樹氏の  
キャリアヒストリー

1966年	0歳	神奈川県生まれ。社員の家庭で育つ
1977年	11歳	クラスの出し物で脚本・演出・主演を経験したのをきっかけに一時映画監督に憧れたが、中学入学後は教師になるのが夢になった
1986年	19歳	全寮制の男子高校から一浪して早稲田大学社会科学部入学。テニスサークルの活動に力を入れる
1990年	23歳	フジテレビジョン入社。ドラマ部に配属され、アシスタント・ディレクターとして『東京ラブストーリー』などの人気ドラマに次々と携わる
1996年	29歳	『みにくいアヒルの子』でセカンド・ディレクターとして連続ドラマ初演出
1998年	31歳	チーフ・ディレクターとして連続ドラマ『神様、もう少しだけ』を演出
2009年	42歳	『のだめカンタービレ 最終楽章 前編』で映画監督デビュー。後編（2010）では総監督を務め、2作合計で観客動員数500万人を超えた
2012年	46歳	監督を務めた映画『テルマエ・ロマエ』が興行収入約60億円の大ヒット。『テルマエ・ロマエII』（2014年4月公開）も公開初日の興行成績で前作を上回る28.7億円を記録している



直筆の人生グラフ。ヒット作を次々と出した30代後半は、仕事に没頭し過ぎたために、体調不良など大変なことも多かった。

フジテレビジョンのディレクターとして、『電車男』『のだめカンタービレ』など数々の人気ドラマを演出してきた武内英樹氏。40代からは映画監督としても活躍し、『のだめカンタービレ 最終楽章』前編・後編、『テルマエ・ロマエ』Ⅰ・Ⅱとこれまでに手がけた4作はすべて大ヒット。近年はコメディ作品が多く、細部のリアリティを追求して観客の笑いを引き出す手腕に定評がある。

ダメモトで受けたフジテレビに入社。  
ドラマはほとんど観たことがなかった

大学卒業までドラマはほとんど観たことがなかった。「中学2年のときにテレビが壊れてからは親の方針で家にテレビがなく、就職活動でも最初はテレビ局を受けるつもりはありませんでした。ただ、なんとなくものを作る仕事に就きたいというのはあって、CMディレクターになるために『マスコミ塾』に通いました。そこで知り合った仲間の多くがフジテレビを受けると言うので、僕もダメモトで受けてみたら、幸運にも採用されたんです」

面接では、学生時代の東京ディズニーランドでのアルバイト経験についてアピールした。

「仕事はジャングルクルーズ(川下りのアトラクション)の船長。あのアトラクションの面白さは船長のトーク次第で、同じ台本でも口調や間合いでお客様の反応が変わります。それをフジテレビの面接で実演したら好評で。面接官との相性もよかったのだと思います」

入社後、ドラマ部に配属されたのも予想外だった。「フジテレビはバラエティ番組のイメージが強かったので、僕はバラエティ志望だったんです。ところが、同期にくっついて参加したドラマ部の飲み会で、プロデューサーの山田良明さんや太多亮さんと話が盛り上がり、ドラマ部配属に。このときも話題はドラマとは関係ないことばかり。同期からは『何でお前が?』と言われました」

入社6年目にドラマを初演出。  
当初はシリアスな作品が多かった

同期60人中4分の1がドラマ部志望だったが、配属されたのは武内氏を含め数名。人気部署に入ったものの、アシスタント・ディレクター（AD）生活は厳しかった。「いざ現場に入ると何をしたいのかわからなくて、年下のADに叱られて。睡眠時間も毎日2、3時間でした。やっていたらいいと思いつつも、当時携わっていたの

は『東京ラブストーリー』『101回目のプロポーズ』『ひとつ屋根の下』といった平均視聴率が20%を超える人気ドラマ。自分がかかわっている仕事をみんなが観てくれているのがうれしくて、次第に楽しくなりました。船出早々、激流にもまれて、必死でさおを動かしているうちに船をこぐのがうまくなり、荒波を越えることも楽しめるようになったというような感じです」

自らドラマを演出する機会が巡ってきたのは、入社6年目。『剣道少女』という単発ドラマだった。

「ここで失敗すれば後がないと、助監督をしていた『北の国から』のスタッフに頭を下げて協力をお願いしました。すると『武内がそこまで言うなら』と身に余る一流スタッフが集まってくれて。彼らの力を貸りて演出したそのドラマが評価され、連続ドラマ『みにくいアヒルの子』のセカンド・ディレクターになりました」

入社8年目には、チーフ・ディレクターに昇格。現在はコメディ作品で評価の高い武内氏だが、キャリアの初期は『神様、もう少しだけ』『彼女たちの時代』などシリアスな作品を数多く手がけた。

「子どものころから人を笑わせるのは好きでしたが、AD時代にシリアスな作品に多くかかわったこと

もあり、コメディ作品を演出する資質が自分にあるとは思っていなかったんです。実際、最初は笑いの演出技術ありませんでした。役者さんの素晴らしい演技を見たり、いい原作と出合って原作ファンが何を面白いのかを追求するうちに笑いの奥深さに取りつかれ、技術を学んでいきました」

### 『のだめカンタービレ』で 映画監督としてもデビュー

『電車男』（2005）、『のだめカンタービレ』（2006）などコメディドラマで評価され、2009年には『のだめカンタービレ』の劇場版で映画監督としてデビューした。

「テレビとは違い、映画はお客さんの反応を生で見られる。笑ってもらいたかった場面で劇場内がドカンと沸いたときの喜びは忘れられません」

『のだめカンタービレ』の劇場版は前編・後編の合計興

行収入約78億円のヒットに。次に会社から持ちかけられたのが、古代ローマを舞台にした人気コミック『テルマエ・ロマエ』の映画化の話だった。

「テレビドラマの映画化ではなく、ゼロから映画を作るのは初めて。チャンスをもらえたことがすごくうれしかったです。僕は映画監督としては駆け出しですが、ドラマは何百本も作ってきた。そこだけは自信がありました」『テルマエ・ロマエ』は約60億円もの興行収入を挙げ、世界各国に配給される大ヒット作に。原作のキャラクター設定やエピソードを生かしつつ、豪華なセットで再現した古代ローマの街並みや臨場感のある音楽など映画ならではの面白さを加え、原作ファンからも評価を得た。

「コメディは真面目にやればやるほど面白いんです。た

とえば『のだめカンタービレ』なら、徹底的に演奏の見せ方や選曲にこだわってクラシックの世界を緻密に描くからこそ、登場人物の変態ぶりやおかしさが際立つ。そうしたドラマ作り、映像作りを『のだめカンタービレ』で学び、そのすべてを『テルマエ・ロマエ』に注ぎ込みました」『テルマエ・ロマエ』の大ヒットを受け、次に手がけた映画が、2014年4月に公開された『テルマエ・ロマエII』。大ヒット作の続編だけに、

興行収入もエンターテインメントとしての質も前作以上の期待がかかったはずだ。

「高尾山の次によく富士山に登れて喜んでいたら、エベレストに登れと言われてような心境でした。ハードルが高くなるほど空気は薄くて、結構つらい（笑）。でも、乗り越える快感はたまらないですよ」

見事「高峰」を制覇し、『テルマエ・ロマエII』も大ヒット。今後は映画、テレビにかかわらず、「笑って泣ける作品」を作り続けていきたいと話す。

「自分が観ていて幸せなんです。気持ちよく笑って最後にホロッと泣けるものが。ただ、笑いにはモロに作り手のセンスが出ますから、コメディは難しいし、すごく怖い。心身ともに健康でないとい作れないので、自己管理には気をつけています。振り返ってみると、僕は『一期一会』の連続でここまでできました。何が起きるかわからないのが楽しい……なんて、最近思います」



## 武内氏は今でも ジャングルクルーズの船長である

大久保幸夫 リクルートワークス研究所 所長

武内氏は、学生時代に、東京ディズニーランドでジャングルクルーズの船長（スキッパー）のアルバイトをしていた。その話題で、フジテレビの採用面接をクリアした。

だが、この話はそれで終わらない。彼のキャリアそのものが、まるでジャングルクルーズの船長なのだ。

何といっても偶然に身を任せたアドベンチャーな人生である。フジテレビに入ったのも、ドラマ部に配属されたのも、偶然の産物。この世界は、はじめから必死に目指していた人のなかから、狭き門を潜り抜けた人だけが辿り着けるところだと思うが、彼の場合はちょっと違っていた。周囲からは随分ねたまれたことだろう。

作品との出会いも偶然だ。『のだめカンタービレ』の原作と出会ったときも、はじめはどこが面白いのかわからず、音大生に「これはどこが面白いの？」と聞いたらしい。『テルマエ・ロマエ』にしても、映画化するように言われたときは、「古代ローマ？ はあ？」という感じだったという。

そのような出会いにもかかわらず、結局は誰よりもその作品の面白さを理解し、最高のエンターテインメントに仕立ててしまう。ジャングルクルーズの船長も、ゲストを楽しませてなんぼの世界。観客をいかに楽しませるかを全力で考える今の仕事と同じである。

そして、ジャングルの旅には、さまざまな猛獣が登場する。ゴリラ、ゾウ、ワニ、カバ、ニシキヘビ。彼には「猛獣使い」の異名があると

いうが、個性豊かな俳優陣をうまく生かす能力に長けているということだろう。

旅の途中には難所もある。滝に飲みこまれそうになるときもある。それを紙一重で潜り抜けて目的地に到達するところも監督の仕事に似ている。

ジャングルクルーズは、ウォルト・ディズニーが、コロンビアの川を遡ったときの体験をもとに作ったアトラクションである。その通り、武内氏も船で川を下っていたわけではなく、遡っていた。そして長年遡っているうちに、いつの間にやらエベレストを目指すような高地にまで辿り着いていた。キャリアのメタファーでいうならば、そのようなイメージではないだろうか。

### キャリアを考えるときに 「メタファー（比喻）」を使う効果

1

無意識だった自らの強みや志向に気付くきっかけになる

2

物語性を活用して、今後のキャリアイメージを描くことができる

3

感情を喚起することができる